

天

たふして事物に於て用と母と用と母と
急と不急との差別ありと作武備を

國家の急了すくはる所ありて其

肝要と決る所の銃砲子に河と銃砲の巧

を不巧に全く縮消の精練ふはけり

是に今にありては消製乃精練、是意

勢を是といふも是は精練を先生に傳ふ

先生書に消製子精く是書中に消

硝石製造辨

目錄

圖式 焰硝煎煉法

土論 文字 土取法

大楹水入

灰汁桶并灰拵

灰漉

灰汁烹煎

中漉

集附 冷鍋

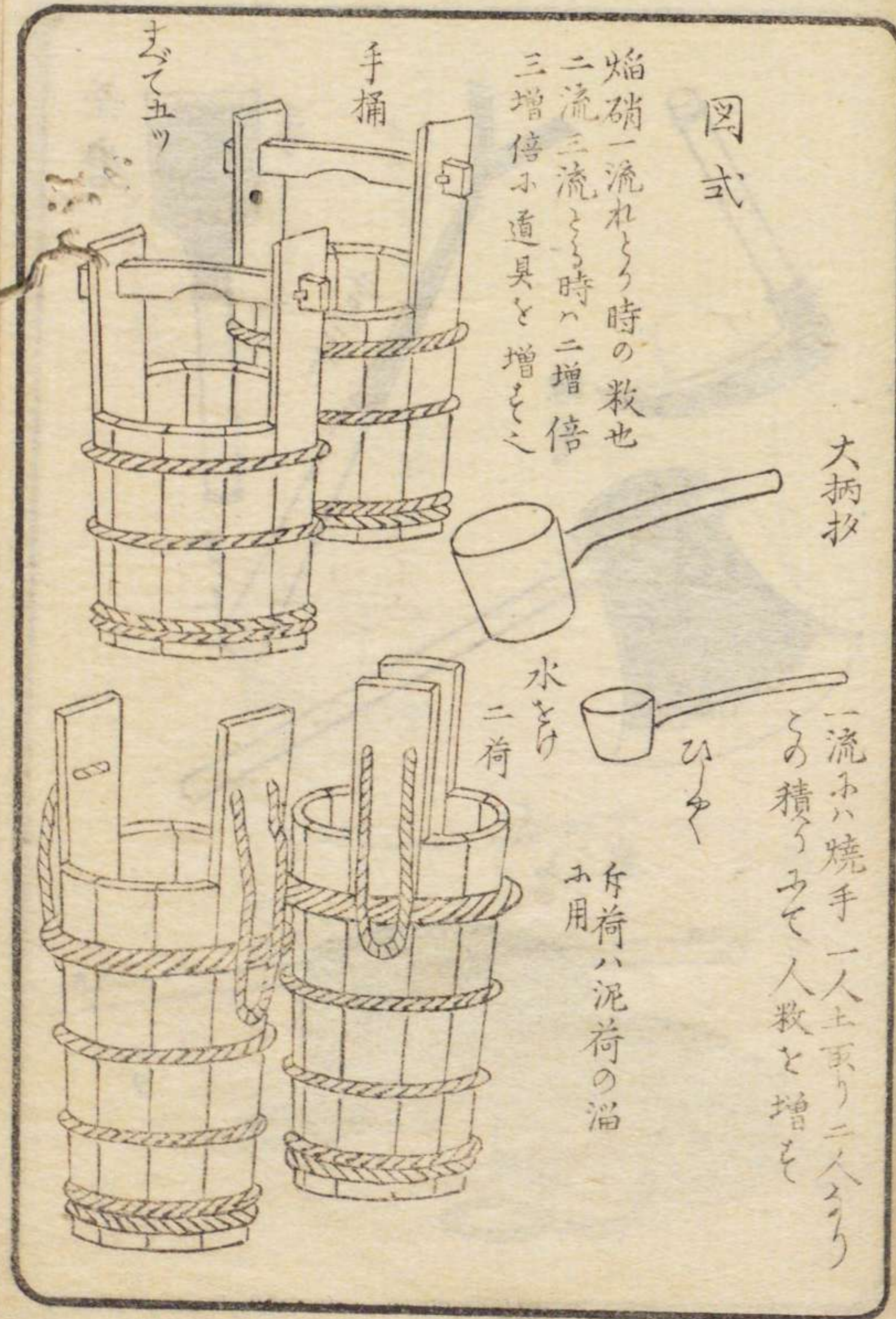
製法の記あり、略然これと讀て精製の編消
と作る處よりよめて梓行を子布うむこと
成思ふ、夫消の價むくの安くして今
考し、此造統砲の盛るるに於て、其の
その製法に通ずるの著く造る事の多うる
其益も少うる、此と云處より、嘉永七年
表二月日

會津藩

奎文老人誌

中野忠順書

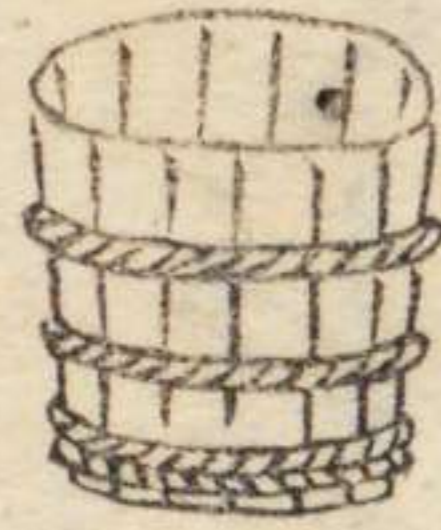




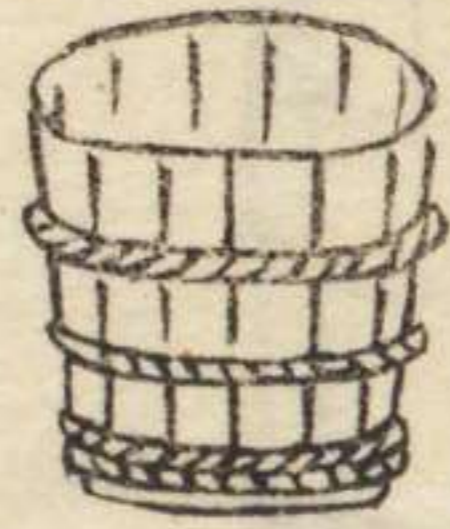
図式

切塩汁
 泥煮種
 中煎曝
 切塩撰物
 清煎釜磨
 塩論傳授 兼方
 附録
 造焰硝
 同傳授
 兼方

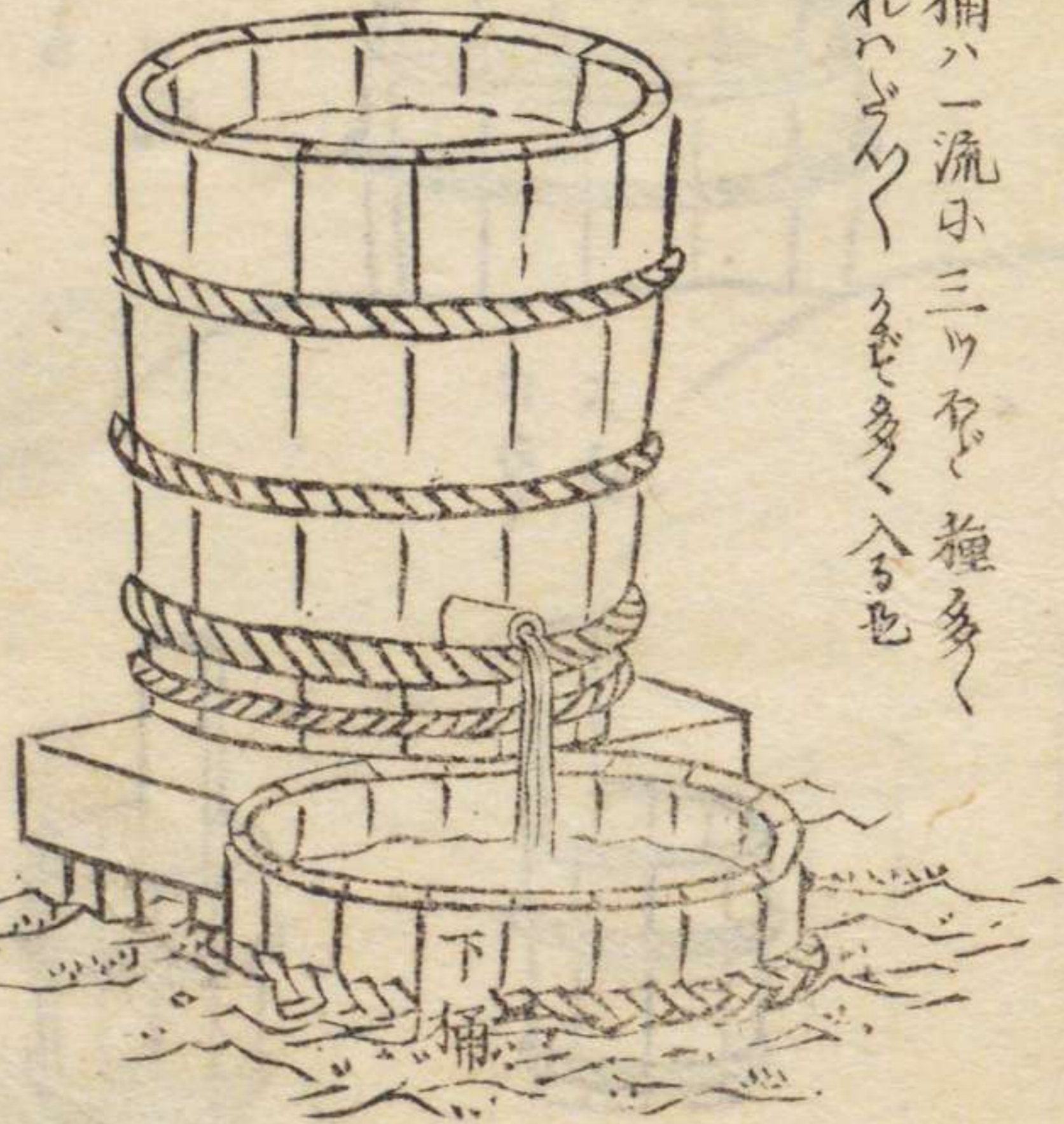
塩桶



桶溜 灰



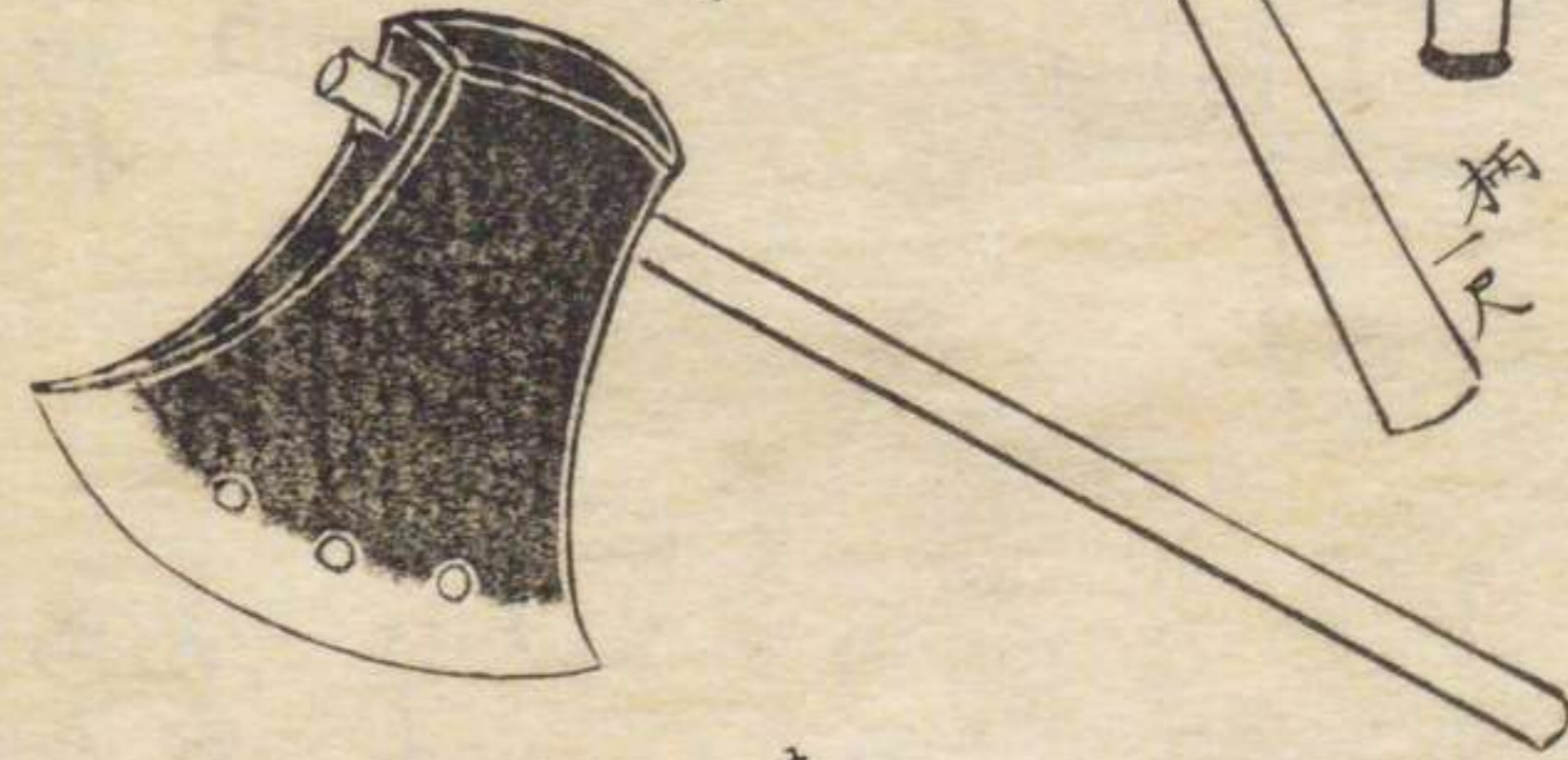
灰桶



溜桶ハ一流小三ツ有種多ク
まれのどんくゝる多入也



鎌



三寸

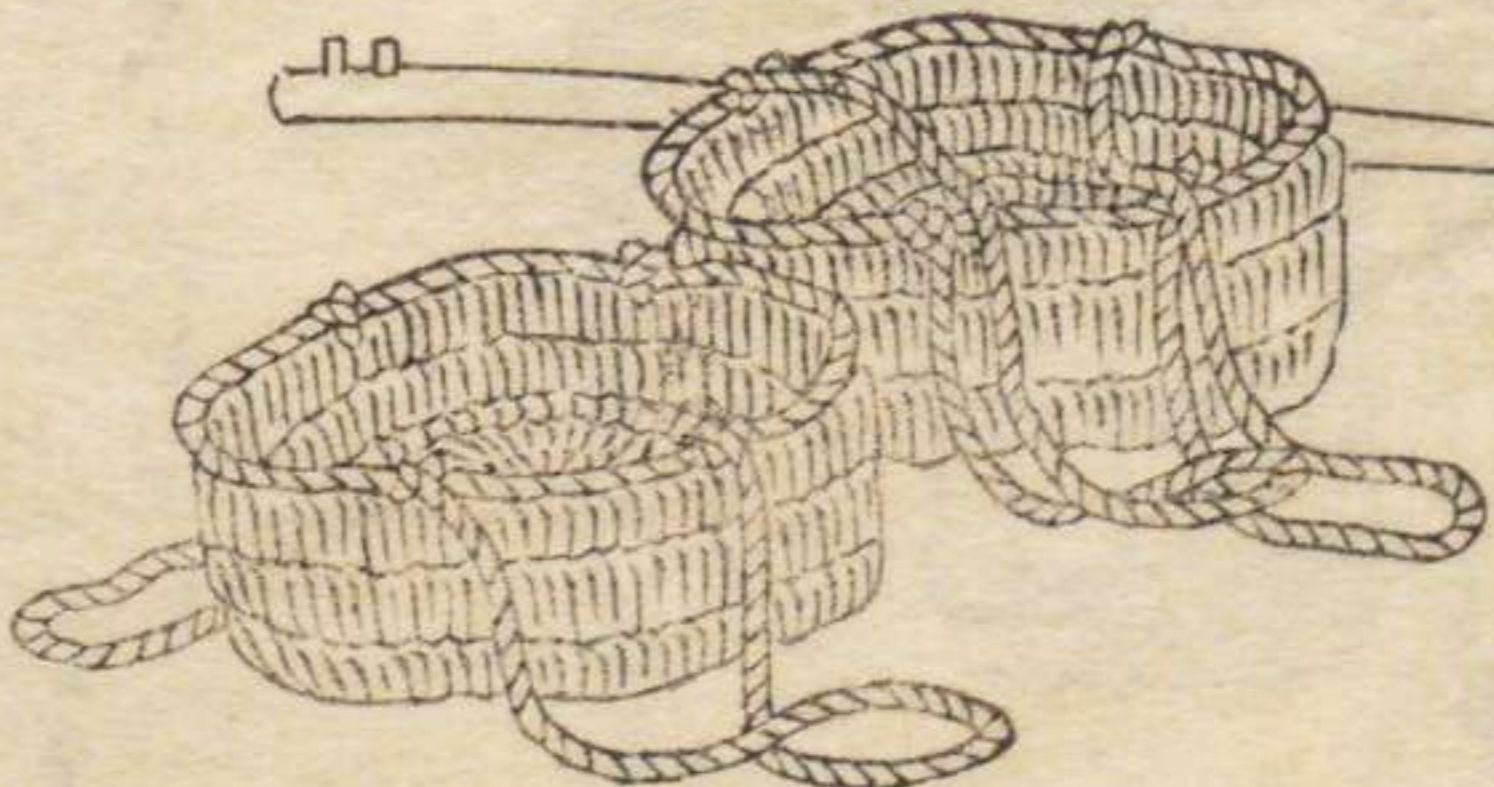
全磨



二尺

一尺

二前
ま



二ツ



漉し布

籠 一尺をく

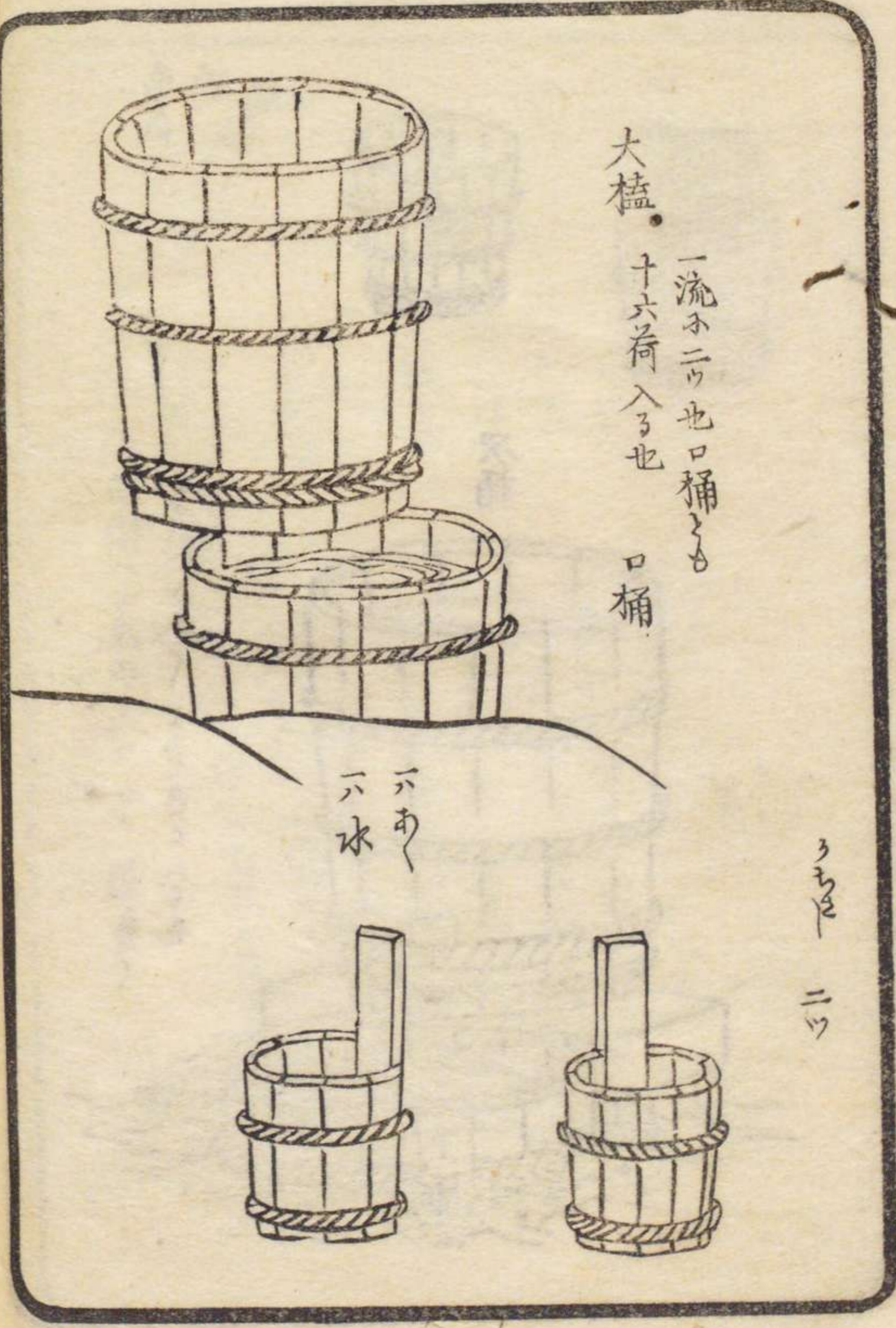
ハ枚るべのくろくどニツ中へ
石と入て随分丈夫火のく
すつろやうよまろと町要也

あぐ煎るく

ニツハ枚

あぐハ
九枚

冷るく
六枚
ニツ

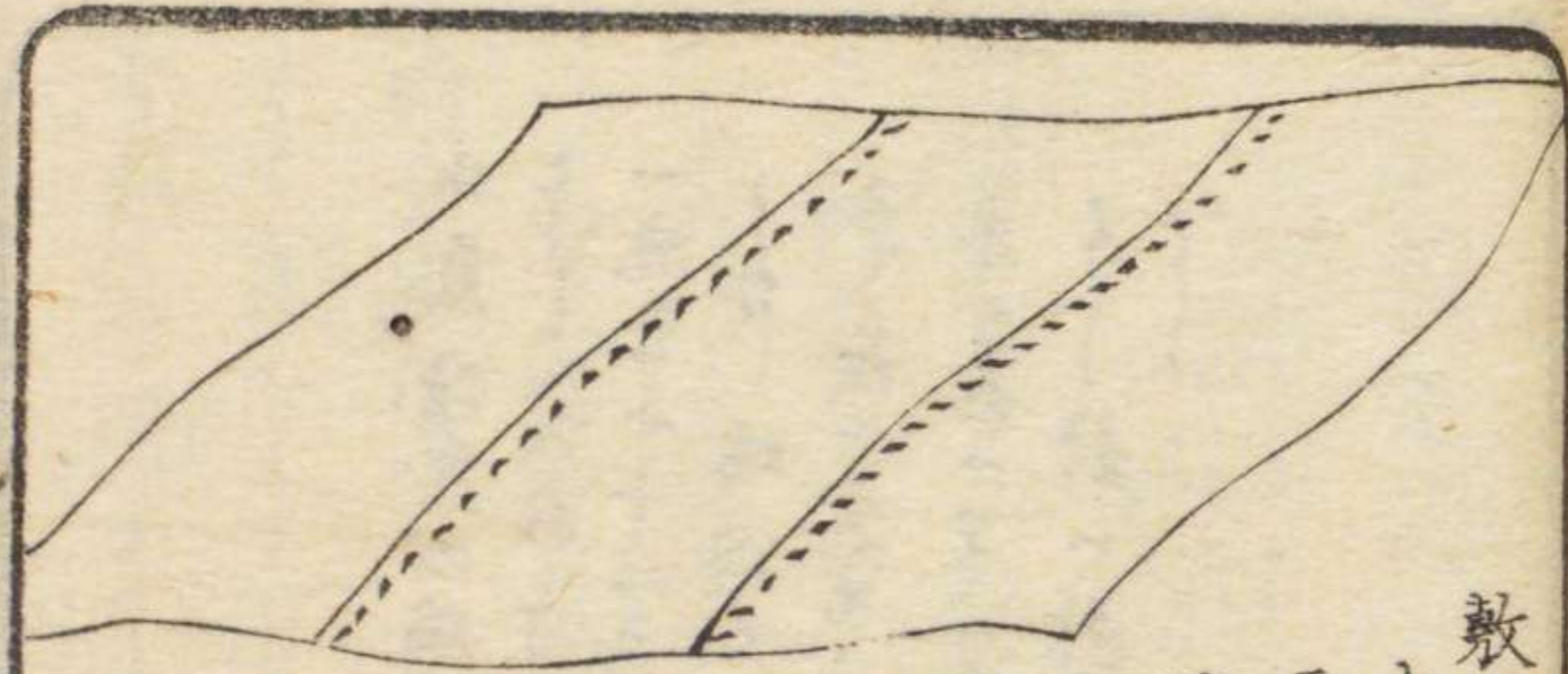


大榼

一流ホニツ也口桶とも
十六荷入る也 口桶

六水

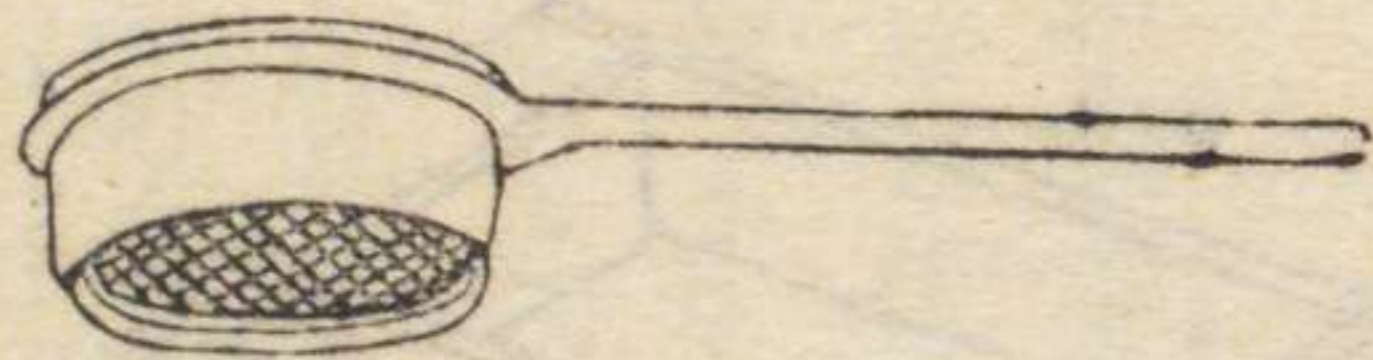
ろく
ニツ



敷布

木ウんまで
二幅半三
巾もよし

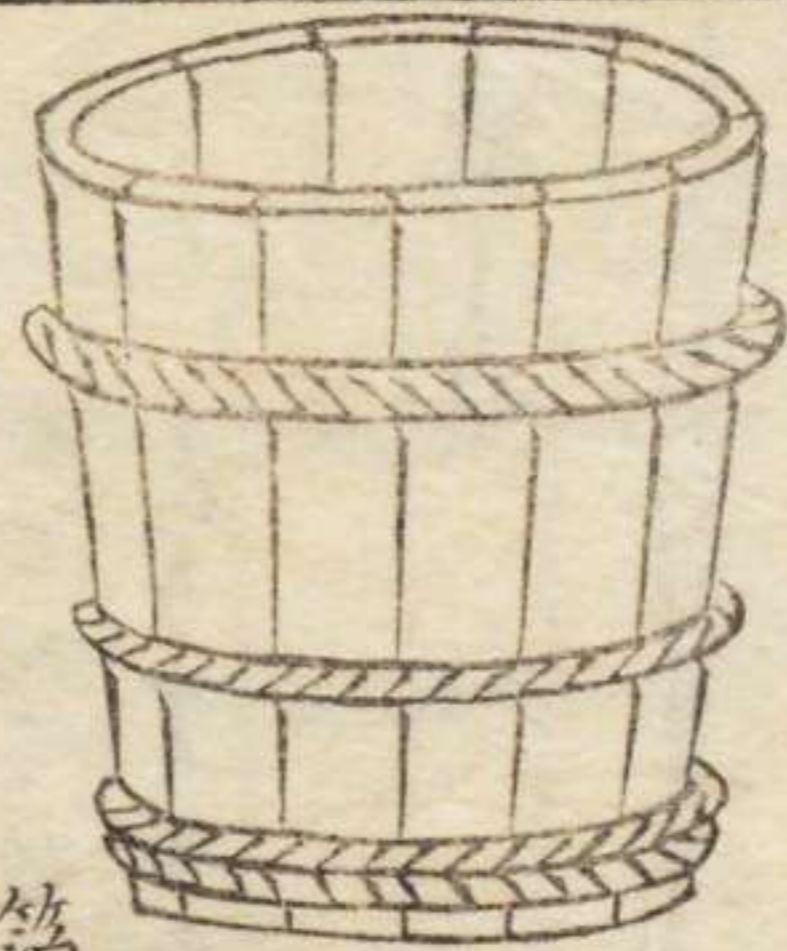
篋抄子



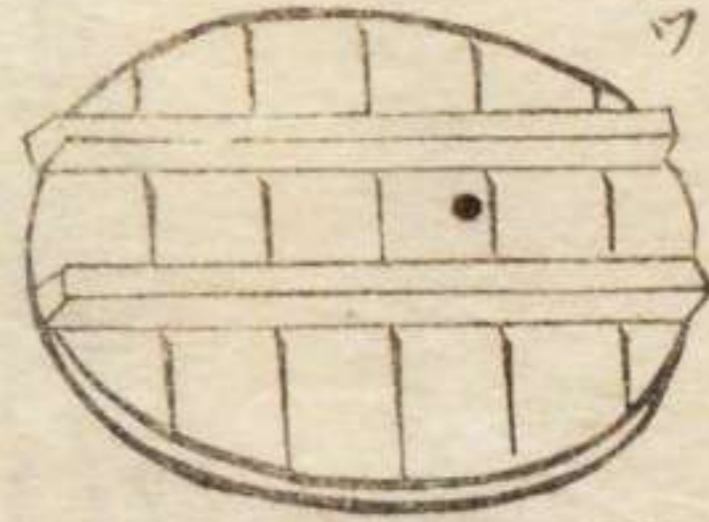
篋木刀

図の如く
少くあるき
あり

一尺
二寸



箔桶
ニツ



合致せしめてツきの
ゆれぬやうに落し
こくまニツ
如图

これハくまきまきまで作り

外の木を
ハ外にまき
ゆきまき
しつゝ

泥煮ニツまき

三ツまきニツ

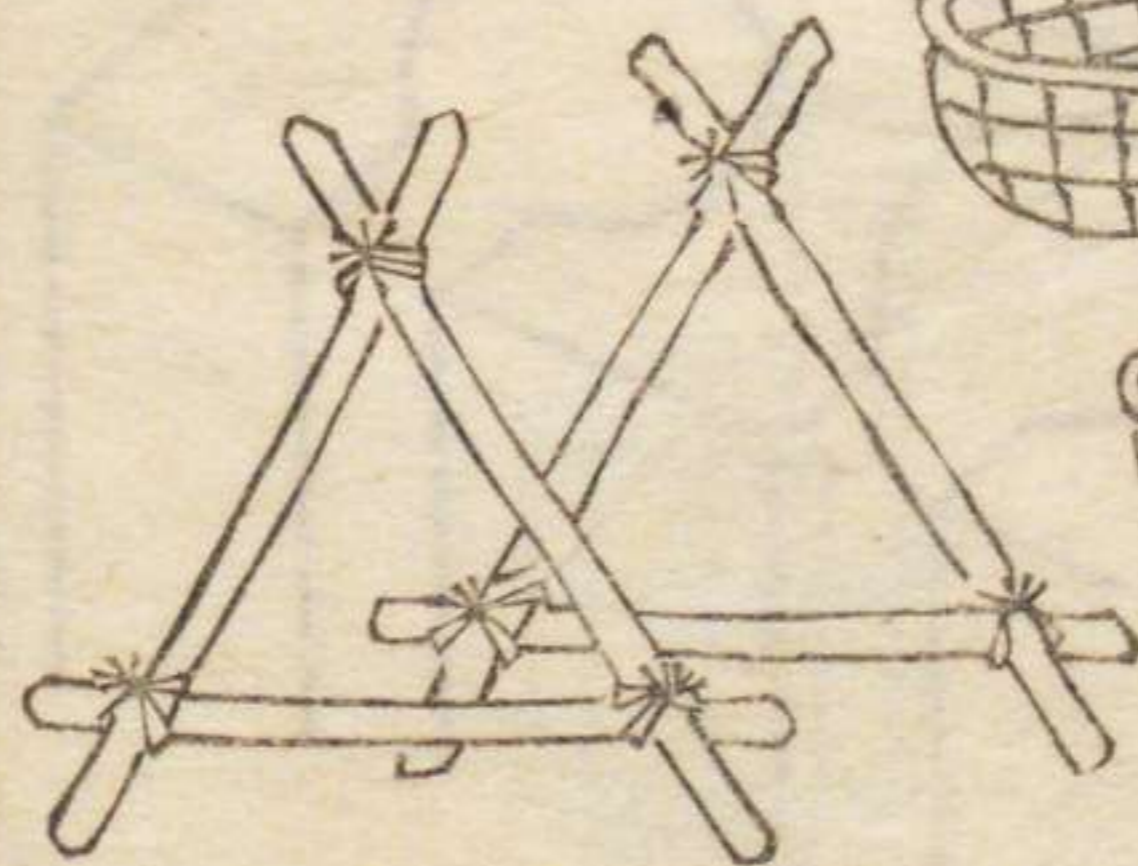
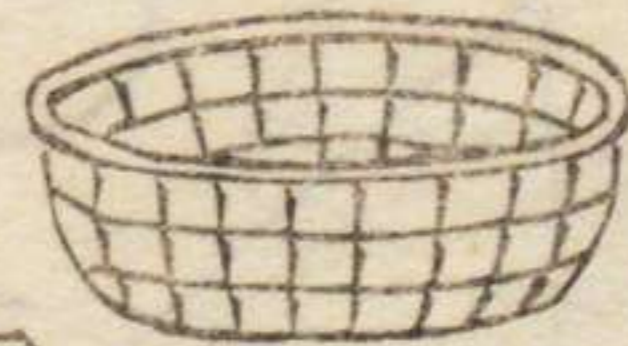
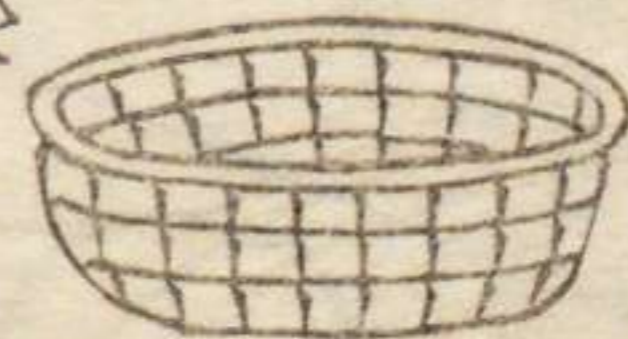
箔桶冷し多ハ枚
半口の上置き
つぎとひくとも

清煎
中煮

大ツまきニツ

中煎 泥煎 二用也

泥煮 つまき



滴と落し附と見らるる扱附もよく冷し鍋より入
るべしその翌日朝五ツ時過四ツ時前より冷し鍋と見まじ
ことごとく針と成り先煎汁と外の桶へおれ即ち
又附らる針と釜磨みくことげ荷ひ桶に入を置く泥煎
塩硝のり賣買のり拾貳三頁目もとりし時中煮ととりあり中
煮の塩硝貳拾頁目とまじり清煎とまじり清煮の仕や
い別紙のりとまじりありの次方とよく覚へて別紙奥に記を
とらの一々糸づとよく合点し又再びらめヶ糸と見ら時
い手ぬりせぬやうふあらべし土小焰硝多くあらと煮やう
あらしむる焰硝多く取まぬのなり少々取るとい出未安

きこ心得べし工夫第一の事なり

土論

山々の大石の下小雨露の年久しくあらしむる取おは自せん
とことありまらつね常小取らのり古家の床下小とれありねつち崩土と
申て農家のり小く肥のり小くきくといふ土やくその土と少くま
とく舌の上小置のりまひくと舌小志とら土小あり一向舌
小志とら土小は焰硝のり無きものなり舌小志とら土小大味
あらしむる焰硝と塩のりとのりやう雨のりよりありとく焰硝
多く塩少くと好むなり此取の味へ筆紙のり小述のりと大のり概辛く
苦くのり錐のり中のりくのりひのりやうのりまらのりは塩多きと知るべし井のりかのりく

味わくあやしくとこまうある小焰硝多く臨の辛味の外小舌
小舌ひ辛き味あり焰硝の善悪多少の知らぬ焰硝并
小臨の無きはこれあり焰硝の善悪の土小ての知
土と採る床の下へ這入り釜磨うこく或は二寸小五六
寸をうのうと板ゆく土と二三寸をづつとをけ取る
座板とまろふ及をん腹をひて掻出し床の下へ這
入るうり口よりへき出く灰をきやく荷ひとる丸け
くぐ或は土やくゆり上げさる火燧をこの久しくあり
さる土の塊くまふいこくく焰硝あるものあり土も四五寸下
には無きものありとく土は薄く四五寸下の取らぬとこ

ありさく家のさめを掃除して臨氣の土ととる故ふる
くさるさぬり焰硝多くあり家ふの壁小五六寸も
這ひあがりてあるものあり又白焰硝の粉の如きものあ
り知らざる人の焰硝のやうと思ふものあり焰硝をさ
形かたちあわくそれを故ふ嘗て試る心得べ
土は赤黒砂小石交りつぐともうく味を取らば一也
塩うさの辛きと又外ふる味あり舌ふる味
あり嘗て多少と知り切者あり砂土まどは小石をけ
らぐ壁下地の古竹くさる手斧くさるなどまうとさる
水やくさる時水洩やくとさる

一流と云ふ内よ知事と云ふ

焰硝焼の九月末より正月二月頃までありと云ふ節より
寒る時へ三月までより春と云ふ二月より三四月
の初よりと云ふよりと云ふ焰硝の性よりと云ふ九月
末より余寒つゞの立春後まで取るべし寒中の焰硝の
格別性よりと云ふと述難し案どる本草をよみしを
てし真偽をいふ出知の委しくあり時珍も自ら
焰硝と焼と云ふ者とい見へん今度藝列の人の製法の
仕上萬端と見て本草の消石馬牙消扑消芒消焰
硝一時ふ夢のさめころが如し畢竟は兵家者流の用

をきこころと同志の人の硝石一通を疑ひと云ふ人爲ふ出
るふ誌と云ふ末焰硝の床の下ふ生る夏潮氣昼夜に満
み随て地上ふのゆるり人の氣血生死も潮の氣と
出入をすころ知死期と云ふも天地の氣一同と云ふ
見たり然ると云ふその潮氣地上ふ外る時露結んで
霜と云ふの時節潮の氣土凝て残と見たり故に九月
末より正月二月の頃まで焰硝と云ふ春暖氷と解
がとき時分の潮の氣土ふ雷らぬ故に春の末より秋初
めまで焰硝と焼す本草に地霜と掃て煎煉をとりあり
兵家ふ用ひて烽燧火の薬と作を火と得ると云ふ

すきりら焰起るをわりまて塩の膽也とあり烽燧火ふ用
るふよりて焰消の名あり誠ふ天地の神物ありとあり
天工開物には諸消のとりやうめとすく白粉
朱輕粉丹をく品々和漢大ふ異あるとありとく潮の氣
結て生る故ふありい雨をのあさる取ふい決してとあり
溝川をく近きところの人家ゆもと無きものあり

文字

焰硝いと消石牙消馬牙消扑消芒消盆消と一物
ありて名と異ふものあり惣名は消石本草は消字

て石篇小従ふものあり焰硝は兵家者流小用る取故ふ名つ
くとあり尤一物の内ゆく形を以て名づくくとあり中煎
清煎とまれい箔桶の内ゆくく牙消馬牙消芒消
焰硝盆消一度小出来を扑消は泥煎の焰硝と見え煎
法のところあり考ふ一板塩硝の文字は見えを志う
が一向ふひごとくありぬとくられも煎法の取あり
考ふ一猶々識者小尋ね問ふ一本草小従ふとさは
焰消と書くべ一又云仙經ふられと以て諸石と消を故
消石と名づくより見えり本草の扑消の下ふ此物水と
見れ一則消を牛馬の諸皮と治熟と故ふ今塩消皮消と俗

小呼ぶとあり塩字始めて見たりとあり消の字は何も
消と用ひさくこの土日おめて風ふあくることより今日朝
より土とより暮より夜中水無きやとより今日取
土明日水無れやとより一焔硝少く水小無きてい
つまで置てもとよりと

土取と法

土と取るい始めより土と嘗く塩と氣のあらしと定めく二
人して灰とと持行簀の下へ這入り釜磨を板のきれ
のろひで土と二三寸こをけ小石壁土のさきより竹切をけ
ららど火燧の土の類ふるさといとくく塩と氣のとり付

ものありとくく這入口無き壁と二尺餘り四方ふ切崩せば
随分自由出入あるものあり日ふ二人して十二三荷つ大
楹の垂れ桶へ荷ひ入るあり拾二三荷つ何きの日少ても煮る
と一流と云二流三流煮い廿六荷三拾九荷ありかを始ふ
土と嘗る時家敷のつよりとく一流煮二流煮あると云
四五十てりしきの取や拾三四荷ありものあり土堅して
取きゆる取いとくく堅き土の上ふやとくく土よ
うとくく例の崩土として農家の肥し小用る土の類を
と土論の取やく考ふべし扱大楹へ入る時とくくと入る
べとと随分ととくくと土のつとくくと入るやうとくく

一向の土斗りてゆく水漏りゆるまり故ふ木のされあらひを
ふる井小石をて水より為ふよりくその上ふ焰硝も
附てあるあり榼の真中小土と杉ありふ盛りあげたま
ひよそろくくと土と一文字ふあらへて押つけ堅むらこ
らうと肝要のこなり

大榼水入

図ふるぐらり通りの大こが二ツ拵への口とよくしめ木口一
寸ほどづの井めて篋とあえ先榼の内をこふ高さ一寸
五分の木と四本しき右の井の篋としき筵としき
つらより土の篋の下へ入れぬやうに念とつれ置き右

の通り小土と荷ひ入るよりさく土の上と一文字あぐ
さんどらうと二ツ三ツ上小置きそのさんどらうの上よりそ
と水と入も右土より榼の口まで四五寸ほど水溜る積又土
とつれ置べし水と入るとあぐくと淡き水一盃又
うると方々より淡き水をさくぶつくとつらより
右の淡き内ふの口と抜くと泥水出るより淡き
とくと止で後の口と明くべし

榼の呑口の如の土と二尺四方をこふ堀り図のとやまの
口桶と居るおまの口とゆくより呑口小井と指ふ及ば
む榼の穴をよりゆくより呑口とゆく時思ひのやう無き

水しみをひつゞく垂たれき水とらむものなり心得大事なり
これ水煎汁せんじゅう至極大切しごくたいせつふするにあり後のちふ至いたてい煎せんト
汁一じゅう滴たつい元水げんすいやくい大分おほぶんのこまりとてい手てふ附つるこれ
水煮汁すいしゅうホやくも手てとより滴たつりより落おとこまり兼あて煮ゆる
と見みるより下働したうできの者ものもかきとて二十にじゅう篇へんやどついで手て滴たつと
より落おしよりき初はついかうきやど手てとより況げんや器きぶの小
附つる滴たつい猶なほの事ことなり後のちいふせめ如ごとくなり我われ知らむ
手てとより滴たつと大切たいせつふするものなり扱あころの滴たつの出いで
止とむより持もち又また舌した口くちとさるなりこれ即すなはち一いち番ばん垂たれなり其
次つぎい二に番ばんこれらの水みづのうへに一いち番ばん垂たれの口くちと嘗かて見て水みづと

入いるより一いち番ばん水みづの半はん分ぶん余ある三分さんぶん二にとつとよりなりとより
一いち番ばん垂たれの味あじ次つぎより少すくく替かへるより三さん番ばん水みづやく心得こころえよりふ
入いるより是こゝに翌日あしたの一いち番ばん水みづふ用もちひ少すくくふても素水すいすいと
入いきぬ利り甚しなり垂たれれ糟ぞうの土つち上うへるふ手て廻まえより三さん番ばん水みづ
い掛けかけより一いち番ばん水みづの掛け水かけみづふ貯たくわへてより扱あころのこれ
この土つちと翌日あした鋤こみて上うがら水みづ氣きあれい泥どろふよりて糟ぞう
あげより翌日あしたのなり故ゆゑふ土つち上うへるまで水みづ氣き残のこらる
とつとよりつより肝要かんようなりこの土つち畑はたけの肥こふより
楯たて一流いちりゅう二本にほんよりこれとも二本にほんよりとてきなりせんぐりよ
りより土上つちうへの勝手かたて掛木かき手て端はふよりとてきなり

此土と又床の下へ灰一置きをやらし四五年かそと一六七
年ふふ塩氣取つくあり

灰論

灰の木灰木綿木の灰蕎麦の灰綿実の灰火燧灰火鉢の灰
釜の下の灰と用也藁灰小麦藁の灰へ用ひむと扱灰
ふは大ふ口傳ありとと一い糸のかぐんの如く垂れ水ふ
土と氣塩と氣灰汁と氣とつとあり煎法の取あぐ考ふ
ア土氣の強ふ焼く時ふきあぐりねぐり出る故ふ灰の
性強くさけと土氣去らぬ塩氣つとさし硝硝少灰
汁氣強ふ灰つよれ澄ど充澄ざる奥の灰漉し取あぐ

考ふべしとの取筆紙ふいのべぐりとうぐり灰のめんむい大支
あり船頭の揮焰硝の灰と心得べし上手下手も灰のつ
合一つあり綿実の灰織屋ふ用り灰の外の灰より性強
故ふ土氣多き時少づ外の灰へ加へ用るなり加減灰と覺
えくより灰の糟これ又肥ふなるなり

灰汁桶と居ひみ灰持

図の如き桶下ふ臺とよとふ持へ灰汁桶と居へ吞ぐらと
廿四五寸をくり穴のさし渡り七八分をくり少一桶の前さか
アふ居へ小指やどぐりの廿あく箕とあし桶のそふ敷筵と
しく大楹の如きしと木ふ及をぬ又箕の替ふわくちも敷

てもとらかりきて呑口の取内下桶とて手かけと二ツをさ
くく用由扱られ水と嘗て灰のつり合と工夫一扱灰桶ふ
の灰と一盃入も志と水と打両手あて至極よく志め合せ
少しも軋きさる灰の無きやうにべらりとさるま八分目
盛り上と一文字ふあう一押へ付へるばどくふ功者ふ
あうと灰桶やく直ふ交せとも初心の内、筵の上あく
能せ灰桶へ入るがうくさなり握てくさうぬやどふを
らくともさるわらふ念入も志め合せ方志めりあれば
忽とらまふ灰ふりさるなりこれもえん俵と置きその上より垂
れ水よりさるを入るなり入るやうい大事なり始めさるく

入る次第ふ急ふ入るなり手桶一盃と序破急ふ入るなり
二盃目よりいせん俵の上よりさるくさるれい小子う金ても
よきなり始め一盃大事なりさて灰りれとい呑口のとさるへ
灰さるり出て仕すいなり上手あても五度ふ一度い灰りさると
せまざうへさるてさるく灰のうと志めり志さるも筆貫の
あんを悪くこれい灰漏とさるなり灰り色のさるとさるい
灰ふ少くさ穴と明けその取よりさるく塘つたの崩くずれさる如く
少の間さるさるなりその時いまぐ急ふ穴へ手とつき込も
灰さるくめ押付るなり古綿古つぎさるあて色々時ふ應おこ下
登明のりさる灰りさるのさる垂れ水い再灰さるとさるなり再い

うとふ及ちむじ

灰漉

宵ふ灰と法の通りふるらへ置前日の垂き水と八枚の平
口鍋へ宵ふ入を置き短日の砌りきき明六ツ前ふ火と打
焼きつけ手引くふふらへ手桶ふ汲と灰桶の上のまん
俵より序破急の心得大事ふ入を二盃目も手ぬりの
無きやうふ入をけその後のくふ入をけけけけけけけ
鍋つもぐくふ入をくくくくくくくくくくくくくくくくく
垂きをふるふる二番無よりけけけけけけけ直ふ灰ぐ
して一番垂煎してけけけけけけけけけけけけけけけけけ

らあり彼土と氣多き淡立目をあつり柄杓まで汲とくくく
汲くくくくても手ふ合ひ不申時淡くくくく半分やどづふ
つめくく二番無と淡に打て淡きつめくくくくくくくくく
一盃などは時へ電の近き取ふかきてけけけ初灰汁桶
より勢ひつらく出るを吉きけけけけけけけけけけけけ
申てけけけありきれい白水の如きもの出る灰と垂き水く
つり合さるや悦事なり扱それとくくく下桶取くくく
くくくくくくく次并ふ色変ト醬油の如くふくくくくく
いふくくく末とくく夫とくくくくくくくくくくくくくく
その見やうの下桶のくく水淡立とくくくくくくくくくくく

桶の底の木理を鏡の如く見へ透くまうこれと本澄が
来るとりまう右の通り本澄おろしとどろくニツの鍋お
入まうゆへ焼くまう明六ツより五ツ過まて本澄う来れい
灰汁仕合がより一と二つより不仕合るれい四ツをさすても
本澄う来ぬものより二番無より手引おろしと不及むは直お
灰汁漉とまうよりこそ不思議あるとあり至極おどきの垂
水と灰汁桶お入れく出る時冷水とどぶと入るまは呑口ひ
と出せぬものより冷水一寸あまい一寸い冷水一寸下いゆけど
とろやどの熱湯お少くもよざり申さぬ寒熱相戦おと
始て悟まう小便道のつらうまはあらど附子のまはら

とらひくことお於て明くまう二番これの冷水と掛るも
心得多くてい呑口止る次お冷水とく道理ありつら
まが試まうお不思議のものより

灰汁煎

右の本澄の灰汁垂まて鍋ニツお九分目お入まて随分火焼か
強く焼き少くも熱へ耗り申と一番これとどろくお入ま
添へ二番これも熱へ耗り次お見合くまお成る時貯へ
置まて淡消のつらま二番の漉水と手桶おつまへの近
取おかき熱へとやま少くあがり随分柄お少く汲まう
口お随分吹まてとやま少くあがり随分柄お少く汲まう

かりからふ及をぬ場ありその時消と手やくも柄扱ても
消と打をゆうふにぐ一尤火勢つよく焼くことされども
その時ハ焼きさうせんもあつて都て物とせんさうし何
斗何升何合ふ煎ドつめるとつとも消消煎ドつめると
篋先と附とやく度と定むるとつとも篋先附ハ奥ふこえ
うり叔五十日百日消消と焼くハ同事ハ一度もそれうり日々焼
きあんの程うるとつともその故ハ棟とあつてつとも町家の土と
煮ても普請の遅くと砂石の替り或ハ近取水道あつて年
救同さつとも地形土の異あり故ハ焼き加減もその
しう瀝も附も針も少々つ替り消消のできとも違

ものさう性ハ二国の中あつていあまりちうとむととどつとく 灰
汁瀝くあつとと瀝水と覺てよう

中瀝

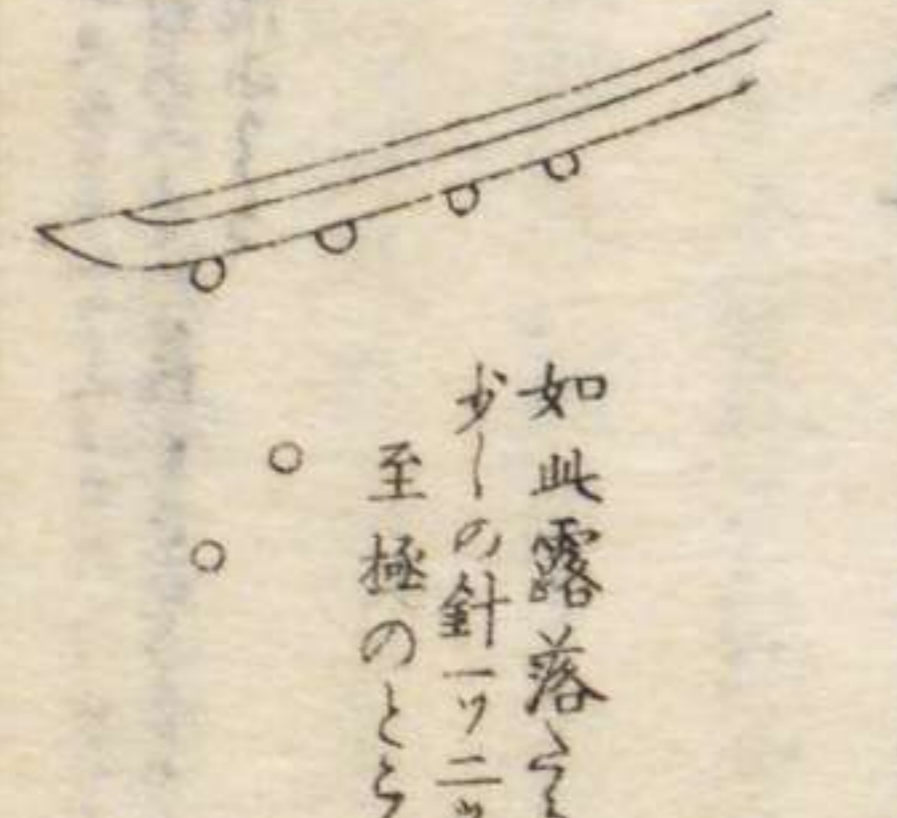
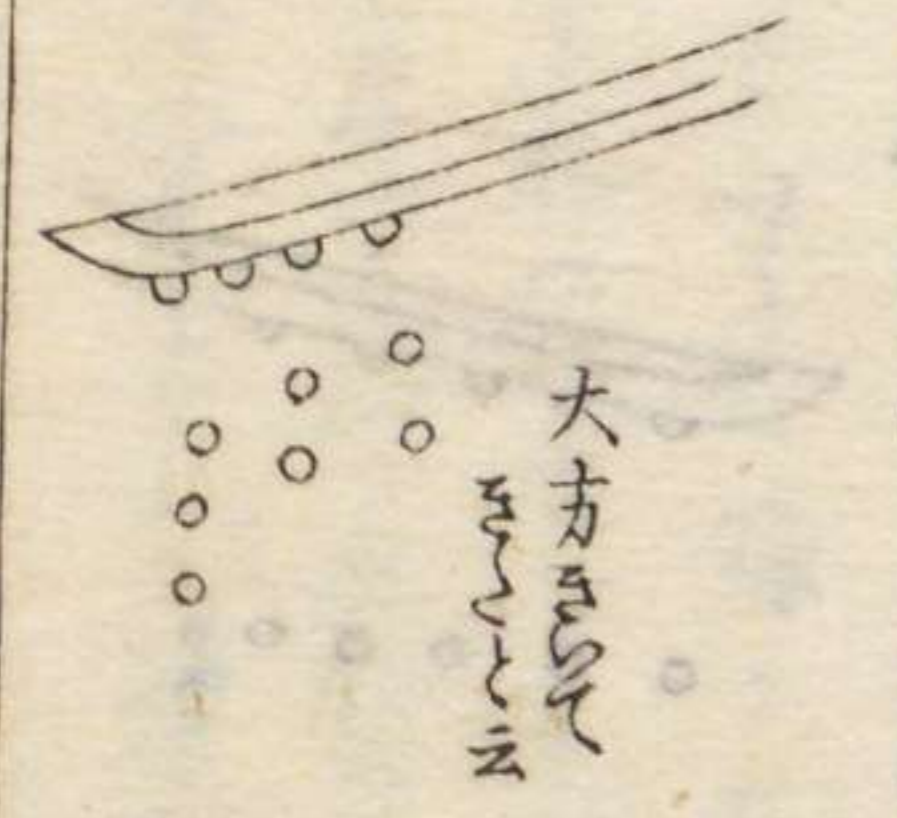
凡ハッ比まで焼き中瀝と云とありそれハ土氣多くね
むつとく或ハ塩多きふとつともつとも三ツ股とさべの上ふ
置き篋と居ハ敷布とさき汲とせハ塩残とつともこの
塩ハつとど焰硝あつとつとも洗物と一取ふつて又翌日の
灰瀝ふ入る奥ふ見つとつとも叔中瀝とさつと集めて火せ
ひもつとく焼く集つとつとも至て秘事ふとつともつともこれ
篋先の見やう次ふあり論ハ泥煎のるんさやう五貫目

もあつたさとりふ三貫目もさきやうふあつたものなり此中
 漉い土氣多しひふ塩多き時ハ是非多くさるることありて
 土氣つらねわり来れい中漉とて病けがささといふ
 此ねわりなり甚ねをり来り時ハ布と出ぬものなり
 つらと志がり出とて一灰より全く灰あく来ぬ故也
 此とて綿実の灰緋屋の灰あく加減とて一功者の
 つら取なり病氣来てあつた捨せ色々療治さるこ
 とあり然しなると翌日と洗物何ふよりつけあつた故中々
 五日や十日をさるとい無しとて煎汁いさるとすると
 悦ふなり灰の故とて多く心と付てさる灰のつら合ひ悪

さとり起る上手ふ煮も下手ふ煮もこの取なり漉布よ
 り洩れぬわどねをとい素人の捨より外はる一五七日もつ
 けやとい結勺捨るさる

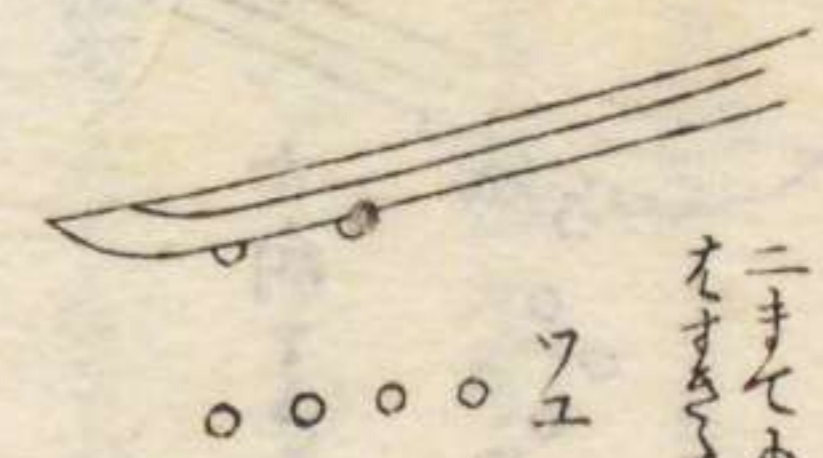
集

篋と朝より鍋へ入さると置きより扱とて水あつ
 ますととくと滴り落し思めとて



如此露落さる跡は
 針ニさる
 至極のととら

二寸七厘大針
をすまゝに用ゐる也



如此五ツカ五ツ六ツカ六ツのついで
針のついでに甚だしくすまゝに用ゐる
附すまゝ



如此針多き集の布漉ゆるとろろ大事なりこのつゆの
味針の残り秘して見とへる人前やくする色々ま
さくもとろり春取りの時やうく見付たり序ふ木刀滴
露の蘊と覚ゆると書ささるへの事なりさて篋先より
しき時ニツの鍋の煎汁と一ツふ集めそのあきまぶのり
ふ三ツ股と置き篋とあきしき布としき煎汁と汲

漉しよくまわり又少々溢のそろ是も洗ひのりと一取ありさく
う仕舞い火とろろくと焼くこれより始終まぶのりふ
居てひさしの附ふらう

附

附へ余り六ヶ敷無きものなり右の篋先集とまぶのりく
煮汁とまぶひつゆとまぶくと鍋の内へまぶひ落し下
つく篋先小残るやどやして鎌々芥々小篋にまぶてがら
がらとつくやうふまぶれひつゆとら△如此餅のまぶら
ときや堅め此少くまぶて押入れ○如此の大まぶあ
つき餅の如き物にまぶるく欠行より至極なりまぶ

時節早々れば涙ぐむて云てびくよとて餅づらうり
そのとれい又とらうくと火と焼き松割木二本ふりえい
一本とらひちうらうくととらうり七ツ過日の入時分もあ
さう鍋へ入る仕舞いさうとらうりあんないよとて
事もたやく仕舞百四五十日のあつて七ツより内仕舞
とらうて四五度あり燈とらうり仕舞ひとらうと二三度有
一日の垂水いかにくとも早くとも是非一日仕舞ふと心
得べし

冷鍋

附もようくく冷しあふらう入るべし一日の煎汁鍋

一ツお集の小八分目あるものより品より六七分目ある
り冷し鍋い五六枚平日鍋と寒氣あつて風のように
入るところと吟味して雨露の入らさうやうお用意して
ふとらうと居へ置三ツ股籠敷布ととらうと熬汁と手
桶ふ入と通ひらう入とらうととらうとらうとらうとらう
此時お温あつて右を中用お立申さう捨る温の論巻末
ふあり考ふべし

箔切針 泥熨焔消

冷しかくふらうとらうと云とあり夜の四ツ九ツ時分お寒
氣と見合せとらうとらうり冷し鍋の上お氷のとも如く出

ものより三十日熬い仕舞三日少く十四五日の焰消出来る
よりそれ故三十日と思ふい五十日五十日と思ふい百日
焼くやうふるものより種々殖ると志すひやど焰消多く
とるものより

種

業ふとるものへ年々種と貯置とも兵家者流の種あり
よつて加の清煎と半斤やと粉やして中漉前うあつめ前
み入るううう一功者ふるまはば初日やも種ふ及をば初日は
随分土と吟味して塩氣多きと用ひ後やは焰と氣少く
とも貯へ水分り用る故ふとく種ふるり随分焰消と

わらものよりその上土よりとるべ尚以てのころより二日よりい
前日のあつめ物汁種とより日く種と出来より

中煎

三四日の泥煎と荷ひ桶に集めをき拾四五頁目より十六
七頁目ふるりていの中煎ととる水加減大事なりを
つく中煎い人み見せぬより扱泥煎の焰消何頁目水
何升と云ふとあれは六うととるいも泥煎の出来不出
来やく誠小目分量時おのいでうげんととるころより飯ととる
うけら如く泥煮より水二寸やとよりてうととる針出来より
ととるあつめ針い水寸四五分汲てう素人み知ととる

さうめふ兼て釜とこの柄ふ何事何外とさうめふ覺えんと
してうゝ畢竟水加減の箸桶の敷塩と分るるさうめふり
塩多きと見とさうめふ一鍋ゆく水四五分う三分う益ぐうさ
消しとさうめふひく俵と水ふ浸しとさうめふ箸釜の下の焼
やう甚大事さうめふ奥よりさうめふ立やうめ火勢つとく焼くさう
めふつくと云と忽吹さうめふさうめふさうめふさうめふ吹ま
さうめふ者さうめふさうめふ取て塩見けとさうめふと云て塩多きを
ば奥よりさうめふ立それとさうめふさうめふ待てうと声とかけと
一拍子ふ薪とやり出し濡しとさうめふと手すをくさうめふ込め火と
消さうめふり火とく者へ消前ふの両手と薪六七本ふけうの

声とひとつ身とさうめふ待つべしとさうめふれの間ふ合ぬさうめふ
と薪五六本も残りさうめふさうめふと薦とさうめふ込めその柄取ふ
つとさうめふ置きとさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふ
近取ふ人あれは
邪まふさうめふ見物の人心得べし塩と氣多と思ふ水と打こ
やう濡きとさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふ
薦とさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふ
と声とさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふ
ば塩いさや鍋のさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふさうめふ
布と志さうめふ手桶とて通ひ入を漉しとさうめふさうめふさうめふ
て大茶碗ふ半分さうめふ水と入を蓋と合紋と合せしめ

中三日置さ酒を充三ッ股篋を布につれも中煮道具
と用也水加減の泥煮凡拾貫目ふ上の水八升中水九升
下二斗とくとも定るとい無一泥煮の出来不出
来ゆく水加減とくとも此法はるの大概なり

曝

中三日置さ箔桶の蓋とあけ内とこれの水晶の如き物
四方八方より橋とかけごと如く出来るとい即馬牙消
して和名つらう焰消なりとを針と云随分ゆきと上品
久しく桶ふおけを麦のつもの如き物桶の内外蓋方へ出
それ芒消なり和名のぞ焰消と毛と云々ゆきと貯へ置さ

久しく月とていふやと白髪しらげの如き毛生るとりさてま
右の大針小針と残らば指まで打とりひろとてふとら
あつて叔煮汁と外の箔桶へよくあつてあ口ふ水と含あ露
の如く茶碗二三盃吹さ付てその水もよくあつてあ叔桶
のぐらりふ白石の如きものありこれ焰消なり底も一面
ふ同しやうあつてものありこれ盆消なり又その下ふ全真塩
の如きものありとを敷塩と云とくらの敷ととの多くて
さわやうふせん為ふとく灰汁澆灰の加減ふ骨と折
とらりらの塩種ふ用也洗ひもの内へ入さ一番垂まてま
せ用也叔脚あしやうの篋あしへせ粉あしの分と入さ次ふ小とらり

み大さうゆりと次子入まき多く大針小針別洒
て吉叔手桶水入小柄扱き汲左の手の内水と
高り上げ左の手ふて羽とつくやうふとれの水玉ふりて
落ろそれと又左の手水と少つてよく晒さ上手
なりきて針の洒してそらへ大事ふひろぎとあへ
乾を扱大さゆりと洒を水とあへるざらとそらへ色黒
し黒さとそらと上へ洒しよくそらなり小さゆりも
同断粉の如くよく黒さとそらとさ出しく洒しよく
ろりよくひろぎへ薄くまきて日お乾するなりひろぎの下
章もよくそらへ乾く晴天四五日も干水とくけき針とれ

やよく乾く堅くろりなり扱商人の清煮と云大方中煮を
念と入まきよくと云やうなりの中煮清煮と云針と
と折中より万端見合ありの中煮の清煮の仕つけの
中煮なり又清煮とそれの中煮の晒しは少く次へて
り

切塩 撰物

大く乳きよく時切塩よりものと云とあり切塩は全く
料理不用ゆ用塩と云のふ似たり方解石一名寒水石と
て福壽州の石基ふく石の如きものなりとれ火みて
焼くとバチリと云て飛ふよりもの全く脂消ふ似て艶

白くいせ飛ひせぬものなりよりもの焰消みよくまじり
ものより去るなりつやまじりものなり故にこれもいせや
しぬの内より変じて形とまじり二品い

清煮

これい余りむらういせぬものなり土氣もまじり同前也
し筵もゆりりとまじりよまじりあまじりことこのまじり
ともまじりなり只むらういせぬ中煮なり清煮の水加減
一斤八合より一升すなり監氣の多らぬ一升よき也
これゆらゆらとまじりあまじりと火と消とより火を見せるも
箔桶へ漉し入るるも中煮と同しこれい中七日前後九日

水ぞ晒と中煮と同し五七日も晴天ふり晒すも
水多くつるを随分色白くあまじりあまじり貫目耗るゆ
水少くよく晒とが上手なり

よく桶より針大と取り出と中煮のよくすれい
過半粉ふるなり煮汁とまじり吹水とよくまじり
と取り扱盆磨して八筋桶をまじりあまじりあまじり
もとまじりと付け切り蓋とよくしめ越して桶のよく底の邊
よりよくうけをひきと桶をまじりあまじりあまじり
の焰消ハ粉ふるても性のうまじりこといせぬれも随分見
よらしく大針大と取りと好む扱中煮と清煮とまじり

三割耗るる中煮よりれは二割半耗る事も出来たり
中煮より又清煮も煮加減するものなり愚西度清
煮より二割の少く内へ入りたるなり初めの十七斤後
七十斤より二割の内へ入りたるなり
此を汁真の種より桶にて貯るる一年を成也
桶の内外より芒消るる吹き出し汁よりふるり
随分水瓶の内外より蒸のうらまをけりぬ
なり大概より水瓶より一ヶ年三割も耗るるなり
てこれを随分書記しこれども筆紙のへりこ
取もあきと二三煎煉とれば工夫よりぬるる

手りくろきこ肝要なり

釜磨

五七日焼ける鍋の内磨ふ人中白の如きの附くるる
鍋とくぐと云ふ少く水と入る少くして釜とど
とりち片豆とくの上おあげ湯とつけくからと入れ
釜とどくの用めて筋と立ちゆるふれい落るる
ひきき耳もさくもるる馴れぬ間磨く者さき
るりよとされい鍋と損とるものなりつけ鍋
すれぬものなり頭痛眩暈痼疾あるもの磨く
たれ故に斂くすれい甚便利なり三度目ハ斂一も

ちり鍋あやまち無し又中煮清煮の酒し寒中をい左
手小性根せうじんをくすり中し病身をしていりやくしあふ抄子の
如く叶きて箆とあし柄と持ち左手のかきうし用ゆるを抄
子と名づく故に図式あり

塩論

此塩ハ捨るころり色黒く粟色あて辛かき苦くのりき之
を焰消と晒とてよく水きて晒し乾とてい清浄けいじやう潔けつ白はくあ
て赤穂あほの真塩まひの如く耳辛みみ至て美味牛の塩しほけし用ゆる
黒色の時の上をのりひひよくしとての塩と水みづ和あし蚯蚓くわん
りらの庭へ柄扱へらをくすり蚯蚓地中より半分出て直し死

す試て余り妙あり故に記をこれも兵家者流には入
用るべきことあり焰消一件のこと故に考ふるを霄今せう炮灸はう論ろんハ
焰消の細末こまあてて鼻はなハ吹入るべ頭痛の妙薬と本草の
外の医書に見えりこれも毎度用ひて切ありさて塩のこ
い本草をひひ天工開物てんこうハ多く品あり中々書記と
みり多ありん本艸の數品見て考ふるその一二と奉て海
より塩とてい大の知る所あり池井草木石をくく
塩と所る大坂の南久宝寺丁より稟子とている者多し
此稟子れいしや糸いと糸いとと云物を用ゆる糸いと元末至極の灰とあてられ
煉うつめとてい右の灰汁と煉つめとてい塩と云てい捨る者

あり全く塩の如くと語りまこれ即木より塩の出るふありや
下品あり菓子の山形鬼せんべいと少入ると菓子大さく
ありや何者仕出しとてや菓子やく塩のつらと不思
議ありと語りたり土よりとる全く土塩ありとれは焰消の
塩と見えたり五種の食塩上品の二ありとあり時珍造化生
物の妙よく知りたりとあり焰消と取るの法は入玉く
地塩と取るの法とてあり塩と取る時焰消と捨て焰を取
るとれは塩と捨る考ふたり焰消ハ塩膽ありとあり塩消の
文字もあらん塩ととり時焰消ハ塩の硝あり硝ハ石ありと
注を考ふたり扱ふの塩と晒し嘗ふふ至て上品あり

うらふ床の下に不浄汚穢の悪物あり故ふ用ひざると思つる軍中
塩多しくありひは籠城ふ使ふとく長雨ハ塩成らばつんとるも
とるふとき時武用あり焰消と取り上品の塩を得るとあり上や
わらんとも汚穢悪物の不浄とるとも軍用の一助あり大根
蕪の糞土の肥ふ甘味と得たり変化天心清浄あり俗ハ
随ふんや故ふ同門の諸君子造化の道ハ迷ふとも

○傳法 凡七頁五百目硝石ト

一合印之場合ふわき扱ふ硝石のつく時千本と唱ふる黒き膠
貳枚半 鶏卵一ツ白味二品と加煮つめて苗の如く鉄管ふくじ
試みて製し上ぐ

○又方 精製

あても多く外り取り一日をくり炎天ふりあけく押切
とつゝのあて細く切り床の土壹尺又二尺をくりもちり
わけて右の艸と厚さ三寸をくり一面敷きざつゝふんどの
の如く高くくりわけて上を土としき床の四方
風の通らさずやうふく^罅と塞ぎ置くるりまらちのま
くり不板とくりり盛るる土の直不柱おつゝさうやう
ある防とあるとて秋お至りて右の土艸のまらちを腐
朽しとて鉄みてくりくり切り返すまらち作り物のま
何みとてん切とて交合せて床の四方前のまらちを圍ひ
かくくり作物のまらちとつゝのまらち一畑草^{あられ}茄子^{あられ}蔓

艸との外何あてもまらち但一水艸嫌ふるりとの
故お稲藁と甚まらち又夏の頃蚕の糞とど
入まかくもらち右のまらち仕つけて置けば三年の
暮お至り既お硝と得まらちの如く仕つけて
上お年々お艸まらちびお作物のまらちと切りとて置け
ばまらち硝気と生まらち多うりこの作り焰硝
とまらちとあり人家の揚げ床おて造作まらちやうあす
しこの作り焰硝の煎煉まらち法自然常の焰硝と
煮る法お同一土の位同まらち少き故おまらち
煎煉しやすまらちのまらち作り硝の土と掘るまらち一尺お

